
蒼い星

可愛 美琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い星

【Nコード】

N3912W

【作者名】

可愛 美琴

【あらすじ】

剣崎 愛羅と、剣崎 空斗。霧夕 疾風と、霧夕 綾乃。この4人が、同じ学院に入学した。2組の双子が桜ヶ丘学院の門を通ったその瞬間から、平和だった生活が音を立てて崩れ始める！

一応、主人公は剣崎 愛羅となっていますが、一話一話、愛羅視点と疾風視点が入れ替わります。

剣崎 愛羅と剣崎 空斗

蒼い星。

とつても綺麗な、蒼い星。

夜空に煌く、蒼。

よく、お兄ちゃんとの川辺で、星を観に来てた。
一度だけ、観たことがある。

綺麗な綺麗な、蒼い星。

「ふああー……」

欠伸をして、ベッドから起き上がる。

なんだかとも、良い夢を見たような気がする。

どんな夢か、忘れちゃったけど。

多分、昔の話かなあ。

「愛羅ー！！早く起きろー！！」

一階から、お兄ちゃんの大声が聞こえて来た。

「もう起きてるよーっ！！」

あたしも、叫び返す。

ふああ……という欠伸を噛み殺しながらもぞもぞとパジャマを脱ぎ、下着姿になると、ぐーっと伸びをしてクローゼットを開け、あたしが通っている学校、桜ヶ丘学院高等部のセーラー服を取り出す。この制服を着るのは、今日が初めて。

つまり、今日は入学式！

と、丁度着替えようとした時、

「愛羅、早く着替え済ませて……」

お兄ちゃんがあたしの部屋に乗り込んできた。

「……な、なな……」

バツ、と体を制服で隠す。

「何で、勝手に入ってくるのよーっ!!」

あたしはそう叫ぶと、お兄ちゃんを部屋から放り出した。

ボタン、と部屋の扉を閉める。

はぁぁ……と溜息を吐くと、手に持っていたセーラー服に着替え
た。

きゅっ、と黄色のリボンを結ぶ。

よし、こんな感じかな。

鏡で自分の姿を見る。

淡い緑と白を基調とした制服に、黄色のリボンが跳ねる。

スカートは、膝上約5cm。

足の形がくつきりと浮かび上がる、黒のレギンス。

目線を上へ持つていくと、鏡の中のアたしと目が合った。

ハーフの為、色素が薄い茶色の髪。長い髪を黒の細めリボンで纏
め、ツインテールにしている。

瞳も、茶色と淡い金色が混ざったような色。

……うん、いつも通り。

用意が済んだ為部屋を出ると、お兄ちゃんがまだ廊下にいた。

「お兄ちゃん。……空そらにい。遅刻するよ」

と、やっと放心状態から抜け出したらしい。

「……あ、あぁ。着替え、済んだのか」

コクン、と頷く。

「……ていうか空にい、ノックも無しで勝手に部屋入って来ないで
よぉ。あたし、まだ着替え中だったのに」

「いやいや、ノックはしたんだけど、返答が無かったから。まだ寝
てるんだと思って」

ということは、あたしが聞こえてなかっただけ……？

空には、まあいいや、と言って立ち上がり、あたしを見る。

「ほら、愛羅。下行こ。朝ご飯出来てるよ」

「あ、うん！」

トントン、と一定のリズムで階段を降りていく空にいを追いかけて、あたしも一階へと降りて行った。

「ほら、早く食べて」

早く、というのは無茶な話だ。

こんな美味しいご飯を早く食べる、とは。

テーブルに並べられた朝ご飯。

苺と生クリームが添えられたパンケーキ。

キャベツ、ピーマン、パプリカの千切りサラダの上にちょこんと何個か乗せられたミニトマト。

後は、他に色々。

今日は特に品数が多いけど、全体的に美味しいから文句無し！

「んん……ちよつと待って……」

パンケーキ最後の一口を口に放り込み、何回か咀嚼そしゃくして、飲み込む。

空にいが手際良く食器を片付け始めるのを横目に、洗面台へと向かう。

洗面台からピンク色の歯ブラシを手に取ると、歯磨き粉を付けて口の中へ。

と、そこへ空にいがやって来た。

「片付け、終わったのふあほ？」

泡の所為せいで上手く喋れていないあたしに、空にいはクスリと笑い掛けて青色の歯ブラシを手に取り、歯磨き粉を付けて口の中へ。

あたしが一足先に歯磨きを終えて、空にいをじつと観察する。

深緑の学ランに、白の少し太い線が入っている。

あたしと似た（ほぼ同じような）顔立ちをしていて、髪質、髪色、肌の色、瞳の色までも同じ。

背はあたしより少し高い位で、172cm。

参考までに一つ。あたしは165cmだから、大体7cm位の差があるの。

高1男子にしては、少し体の線が細いような気がする。

だからと言って、ガリガリという訳でもない。簡単に言うと、華奢な体型。

遠目から見たら、女の子にも見えるかもしれない。

さっぱりとしたショートヘアは、いつもあたしが切ってあげてる。クセなんか全然無くて、凄くサラサラだから逆に切りづらいんだけど。

色の白い肌に茶色と金色が混ざったような瞳があって、凄く目立つ。

あたしと違うところは……顔で言ったら、唇、かな。

ほんのりとした紅色でぽってとしたあたしと違って、淡い桃色をした薄い唇。赤と桃が混ざり合ったような、明るいのが暗いのが分からない色。

と、歯磨きが終わって、空にいがあたしを見る。

「愛羅、どうかした？　じっと見たりして」

「あ、ううん。何でもない。やっぱり、似てるなあって思ってたははっ、と空にいが笑う。

「似てるのは当たり前だよ。だって僕達、双子なんだから」

……そう、あたし達は双子。だから、こんなにも似ているのだ。

あたし、剣崎 愛羅と、空にいこと、剣崎 空斗。

同じ顔、同じ声。

……と言っても、流石に高校までになったから、区別は付くんだろっけど。

中学の時は大変だったなあ……。

同じ顔、同じ声、同じ体型、同じ髪型、同じ一人称。実の親までも区別が付かない位だったんだから。

最近空にいの方が身長高くなっちゃったから、なんとか区別が付くって位。

「だからさ、愛羅」

いきなり、空にいがあたしを呼んだ。

「双子なんだから、僕のこと“お兄ちゃん”とか“空にい”とか止めてよ。普通に“空斗”って呼び捨てにして？ これ、僕からのお願ひ」

それに、少し悩んでしまう。

いや、中2位までは呼び捨てだったんだけど……。うーん……。

数分考えて、やっと結論が出る。

「ま、いいよ。それじゃあ、前と同じように、空斗、ね」

あたしがそう呼ぶと、空にい……じゃない、空斗がニッコリと笑った。

あ、そういえば。

「…ねえ、時間大丈夫なの？ 入学式……」

ハッ、と空斗が時計を見る。

あたしも釣られて時計を見ると、まだ7時50分。多分、入学式は9時頃からだっただと思う。

「ちょっと早めに行く方が良いみたいだから、もう行こっか？」

空斗の問いに、あたしも頷いた。

剣崎 愛羅と剣崎 空斗（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です。

今回のも、色々と楽しそうです

今やっている連載の『ピアノソナタは永遠に』と掛け持ち出来るか
分かりませんが、何とか頑張ってみましようか。

不定期更新となりますが、ご了承下さいませ。

それでわ、また次回ーノノ

霧夕 疾風と霧夕 綾乃

同じ顔をした少女と、少年……（？）が川辺に座って星を眺めているのが見えた。

俺も、一旦足を止めて、その二人を見つめる。

何をしているんだろう、と。

すると、声が聞こえてきた。

「ソラト。アレ、蒼いよ」

少女の声。

「うんそうだね、アイラ。……蒼い星、だね」

少年の声。

でも、二人とも同じ声をしている。

「ねえねえ、ソラト。あの星、どうして蒼いの？」

「さあ、どうしてだろう。僕にも、分からないや」

……蒼い、星？ そんな物あるはずがないだろう。

「ボク、あの星を持って帰りたいな。凄く、綺麗なんだもん」

「うん……僕もだよ。……とっても、綺麗だね」

俺は、ゆっくりと空を見上げた。

いつものように、暗い紺色をした夜空の上に、明るい黄色をした星が瞬またたいている。でも、その中で一際目を引く物があった。

蒼い星。

蒼く煌めく星がそこにはあった。

明るい黄色の上に、蒼色のペンキを塗ったみたいだったけど、何故かとても目を引いた。

凄く、綺麗だと思った。

夜空に煌く、蒼い星。

俺は、ぱちりと目を開けた。

……何だろう。夢を、見ていたのだろうか。

でも、とつても良い夢だったような気がする。

昔の話、か……？

と、そこで時計を見る。

7時、30分。

……はあ、寝坊したな……。

「ふあー……。眠てえ……」

綾乃はまだ、眠っているはずだ。アイツは俺が起こさない限り、延々と寝てるからな……。

バサツと着ていた服を脱ぎ、学ランに着替える。

まだ新しいこの制服は、桜ヶ丘学院高等部の物。深緑と白を基本にした学ランは、どうしても頭の良い私立校ということを否応無く突きつけて来る。

綾乃には、何故か“とても似合っている”と言われてしまった。多分、この髪と瞳の所為だろう。

カタン、という音を響かせながら適当に鏡を取り、自分の姿を見る。

漆黒の闇色をした、少しはねた髪。

ハーフの為、明るい蒼色をした切れ長の瞳。その瞳の色は、“何か”を連想させる。

……そうだ。さっき見た夢の、“蒼い星”と色がほぼ同じなんだ。夢、と言つても、アレは本当にあつた話だ。昔の、俺が小学3年の時に観た星。

凄く凄く綺麗な、蒼だった。

色が似ていても、俺のとは少し違う。

俺のは、爛々と楽しそうに光る蒼。

あの星は、とつても静かに光る蒼。

とても静かに光っているのに。

周りの星よりも、薄い存在だったのに。

それなのに何故か、とてもとても目を引いた。
凄く、綺麗だと思った。

どうして、だろう。

「……考えても、キリがねえな。……さて、綾乃を起こすか」
無理矢理思考を切り替えて、ぐぐつと伸びをすると、俺は部屋を
出た。

俺の部屋の真向かいが、綾乃の部屋だ。

丸っこい字で、“綾乃のお部屋”と書いてあるプレートがぶ
ら下がっている。

念の為ノックをするが、返事は無い。まだ、眠っているのだろう。
扉を開け、部屋に入る。

薄いピンクと、淡い赤色の部屋。……綾乃らしい。

シャツ、とカーテンと窓を開け、外の空気を取り入れる。まだ4
月だから、風は少し肌寒いような気もするが、陽の光はポカポカと
暖かい。

桜の花弁が一枚、窓から部屋に入って来た。

俺はソレを優しく掴むと、綾乃が眠っているベッドの上に座り、
漆黒の長いストレートヘアを優しく撫でた。

「綾乃、起きろ。……綾。学校、行くぞ」

俺の声に、綾乃がピクリと反応する。

「んんう……。疾風……？」

「俺以外誰が居るんだよ。ホラ、早く起きろ」

ゆさゆさと体を揺ると、綾乃がやっと目を覚ました。

「おはよ、綾」

「おはよう、疾風……」

俺と同じ髪色、同じ髪質、同じ肌の色、同じ瞳の色。違うところ
と言えば、瞳から受ける印象、だろうか。

綾乃は、猫のようなクリクリとした蒼い瞳。長い、くるっとした
睫毛がその印象をより強めている。

俺は、切れ長の爛々と楽しそうに光る蒼い瞳。人によってはキツ

イ印象を受ける人も少なくはないが、大抵の人は“やんちゃ”な印象を受けるのだとか。コレは、綾乃からの受け売りだ。

……と、少し話が逸れたが、ここまで来ればもう分かるだろうか。

俺と綾乃は、双子。

俺、霧夕きりゆう・はやて 疾風と、綾こと、霧夕きりゆう・あやの 綾乃。

綾乃は、目を擦って起き上がると、俺をじっと見つめた。

「久しぶりだね、その呼び方」

綾乃がニッコリと優しく笑うと、俺と同じ色の蒼い瞳が少し細められる。

「そうか？ 綾乃が起きない時は、時々使ってたけど」

本当？ と呟く綾乃に、ああ、とだけ言って立ち上がる。

「……ぎゅって、してくれないの？」

小さく問いかける声。

「それやってたの、小学校の頃だろ。高1にもなって、まだ俺に抱き締められなきゃ起きられないのか？」

悪戯いたずらっぽい調子でそう言って、ククツ、と笑う。

「……だって。最近、ぎゅってしてくれしたことないもん」

起きてすぐだから、甘えるような口調になっている。

俺は、ふっ、と薄く微笑むと、綾乃を軽く抱き締めた。

綾乃の体温が、抱き締めているところから伝わってくる。

……少し、心地良い。

ポンポン、と頭を優しく撫でて綾乃を離す。

まだ少し物足りない、というような表情をしている綾乃に、

「ホラ、これ。窓から入って来た」

さっきの花弁はなびらを渡す。

きよとん、とした表情で一瞬だけ俺を見て、すぐに、パアアアツと明るい表情になった。

「外、桜咲いてるけど。多分、桜ヶ丘まで行ったら満開だろうな。

…早く支度して、見に行くぞ」

ニッコツと微笑んで部屋を出た。

霧夕 疾風と霧夕 綾乃（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です

今回は、疾風視点です。

男の子の視点って書きづらいですね…。

コレ書いてて、身を持って知りました。

すっごく難しいです。何考えるのか分からないですし。

まあまあ、頑張ります。

次回、愛羅視点です。

入学式

艶々とした、丸みのある黒のパンプスを履くと、あたしは鞆を持つて外へ出た。

「ふああ……。眠いなあ……」

ぐうう、と伸びをして、一度だけ欠伸をする。

空斗がそんなあたしを見て、クスツと笑った。

「今日目覚め良かったのに、まだ眠いの？」

「うるさい。眠いものは眠いの。……あ、そういえば今日、夢を見たんだよ」

唐突に今日見た夢を思い出して、そう呟いた。

「へえ……。どんな夢？」

「夢、というか。昔の話。……ホラ、蒼い星のこと。覚えてる？」

じっと見つめてそう聞くと、勿論だよ、という答えが返って来た。

「あの星、とつても綺麗だったよね。蒼い光が、凄く神秘的で……」

と、あの蒼い星のことを話しながら、あたし達は学校へと向かった。

軽く周りを見渡すと、桜がちらほら咲いていることに気が付いた。

「……ね、空斗」

ひらひらと舞い落ちて来た桜の花卉を一枚、指で軽く掴まえて、

空斗を呼ぶ。

「何？ 愛羅」

ニツコリと微笑って、空斗があたしに問う。

じっと、掴まえた花卉を見つめながら、小さく呟いた。

「桜ヶ丘は、もう、満開なのかな」

あたしの声に対して、ゆっくりりと、噛み締めるように小さく呟く声が届いた。

「……そう、だろうね。あの時と、きつと、変わってないよ」

うん、そうだよね。あの桜はきつと、何も変わってない。変わっ

たのはきつと、あたし達 ……。

「そういえばさ、愛羅」

暗い雰囲気を持ち消すように、空斗が明るい声で言った。

「愛羅って、桜、好きだったよね？」

ニツコリと、微笑ったままで。でもその微笑みは、何処か、哀し
そうにも見えた。

ねえ、空斗。どうして、そんな哀しそうな顔するの？

……あたしの、所為せい？

そうなの？ 空斗。

ねえ、答えてよ ……。

「……うん、そうだね。桜、好きだよ」

こんな暗い、沈んだ気持ち、早く消したくて、あたしは質問に答
えた。

「桜、好きなんだよね？ それなら、どうしてそんな顔するの？」

空斗が急に、あたしに問うた。さっきとはまた違った、微笑みで。

「……そんな、顔？」

言ってる意味が、よく、分からない。

あたしは今、どんな顔をしているのだろうか。よく、分からない。

「愛羅、暗い顔してる。まるで、憎しみの塊かたまり、みたいなの。桜のこ
とが、憎くて憎くて、仕方が無い、みたいなの。……そんな、顔」

……“桜が、憎い”？

気が付くと、さっきまで掴んでいた桜の花弁はなびらが、指の中でグシャ
グシャに千切れている。

……あたしが、やったのだろうか。

分からない。思い出せない。……あのことも、何もかも。

「……桜が、嫌いな訳じゃないの」

何時の間にか、小さく呟つぶやいていた。

まるで、自分に言い聞かせるように。

「桜が、嫌いなんじゃない。ただ……桜を見ていると、あの子を思
い出してしまうから」

あたしの呟きに、答える声は無かった。

重い沈黙のまま歩いていくと、目の前に綺麗な校舎が見えてきた。そこが、桜ヶ丘学院さくらががおかぐいん。右に小等部、中央に中等部、左に高等部が立ち並ぶ学校だ。少し離れた所に、桜ヶ丘学院大学、というのもある。

あたし達と同じ制服を着た子達が、少し緊張したような表情で入って行く。

この光景を見るのも、5年ぶりだな……。

そう思いながら、あたしと空斗がゆっくりと門をくぐって行った。

「…空斗」

まだ続いていた重い沈黙を破り、あたしがポツリと呟いた。

「この学校を見るのも、久しぶりだね」

「うん、そうだね」

返って来るかどうか心配だったけれど、ちゃんと返って来た。

「……………愛羅。あの時のこと、まだ覚えてる？」

急に、空斗が言った。

「……………勿論、覚えてるよ。忘れることなんて、出来ないもの」

そうよ。忘れるなんて、出来る筈、無い。

「あの子も、まだこの学校に居るのかな」

小さく小さく、呟いた。聞こえるか聞こえないか、という位の声で。

普通の人なら、多分、聞こえないだろう。

でも、空斗は。

「まだ、居る筈だよ。あの子は、自分の兄にくっ付いてしか、生きていけないから」

あたしの、双子の兄だから。

しっかりとした声で、あたしの声に答えた。

と、いきなり。

「ハヤテ。桜、満開だよ！」

あの子の、声がした。

パツ、と後ろを振り向く。

あたし達と少し離れた所に、髪の毛の長い少女が立っていた。

艶々サラサラの長い黒髪。

色の白い肌。

スレンダーな体。

大きな、蒼い瞳。

どくん、と心臓が大きく波打った。

……と、その少女がゆっくりとこちらを振り向いて。

一度、ぐるりと周りを見渡して。

一瞬だけ、目が合った。

捉えた。

蒼い瞳が、あたしを

じっと、見つめる。

あたしは、小さく呟いた。

「……霧夕、綾乃……！！」

入学式（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です。

同時進行で更新中の、『ピアノソナタは永遠に』より、この『蒼い星』の方が進め易いというのはどうしてでしょうか！？
早く、あっちのも書かなきゃいけないんですけどね……。
中々進まないんですよ。
ヤバイです……。

てか、今回はあまり書くこと無いです。

次回、疾風視点です。
それでわ、また次回ーノノ

少女

テクテクと学校までの道を歩いていく。

綾乃は、周りに咲いている桜ばかりを見ていて、少々危なっかしい。

「ホラ見て、疾風！ 桜がいっぱい！」

「ああ、そうだな」

パタパタと花弁はなびらを追いかけて走っていく綾乃を見ながら、ぐるりと周りを見渡す。

俺達と同じ制服を着た奴らが沢山居る。

その中で、一際目立つ外見をした少女と少年を見かけた。

色素の薄い茶色の髪を黒の細いリボンで纏まとめ、ツインテールにした少女。

その少女と同じ髪色で、さっぱりとしたショートヘアの少年。

真っ白の肌に、茶と金が混ざったような瞳。

同じ顔、同じ雰囲気。

双子、か？

何故か、今日の夢を思い出す。

そういえば、あの時、星を眺めてたのはあの二人じゃないのか…

…？

キラキラと夜でも輝く、茶色の髪。

白い、透明感のある肌。

茶と金が混ざったような色の瞳。

同じ、顔。

その二人も、俺達と同じ制服を着ているから、桜ヶ丘学院高等部の生徒なのだろうか……。

綾乃が、門の中に入って、俺を呼ぶ。

「疾風。桜、満開だよ！」

ニッコリと楽しそうな笑顔を浮かべて。

綾乃は、ぐるりと周りを見渡す。
……と、綾乃の瞳が、その少女を捉えた。
さつきまでの楽しそうな笑顔が、一瞬にして消える。
絶望と哀しみが入り混じったような表情で、小さく呟いた。

「けんざき 剣崎、あいら 愛羅……！」

……ケンザキ、アイラ？

その少女の名前だろうか。

というか、綾乃がどうしてそんな哀しそうな表情をするのかが分からない。

その、“ケンザキ アイラ”と呼ばれた少女も、苦痛に顔を歪めている。

綾乃を、辛そうに、じつと見つめたままで。

綾乃も、じつと見つめ返している。

辛そうに、苦しそうに、……哀しそうに、顔を歪めて。

「……綾乃。知り合い、なのか？」

俺は、何をすればいいか分からなくて、見れば誰でも分かるようなことを訊いた。

綾乃は、小さく、うん、と頷いた。

「……あたしが、小等部の頃助けられなかった、……親友」

小さい声で、苦痛に満ちた声で。

助け、られなかった？

それは、どういうことだろうか。

俺には、意味がよく、分からなかった。

……と。少女が、近づいて来る。

「……綾乃。久しぶり」

鈴のように、綺麗な声だった。

その少女が、綾乃の隣に居る俺を見る。
冷たい、氷のような瞳で俺を見つめた。
大きな、茶と金が混じったような色の瞳が、すうつ……と細められた。

「……貴方は？」

誰だ、と訊いているのだろう。

俺がその質問に答えようと口を開いた瞬間。

「霧夕きりゆう・はやて 疾風君。霧夕 綾乃ちゃんの、双子の兄だよ」

少し低い、優しい響きを持った声がそれを遮った。

「ソラト」

少女の隣に、よく似た顔立ちの少年が立っていた。

「……アンタ、誰だ？ どうして俺と綾乃の名を知っている？」

その、優しげな顔を睨みながら、低い声でそう訊くと、俺の目の前にいる奴は、ククツ…と冷たく笑った。

「君、本当に何も知らないんだね。双子の妹のことくらい、ちゃんと見てあげないと」

「なっ……。どういう意味だよ!？」

スツ…と、顔から表情が消えた。冷たい表情が消え、優しげな雰囲気までも、全ての感情が無くなったようだ。

背筋が、ゾクツとした。

ゆっくりと、口が開かれる。

「君の妹は、小等部の頃、僕の妹をいじめていたんだよ」

……え？

今、コイツは、何て言った？

“君の妹は、僕の妹を、いじめていた”

綾乃は、目の前にいる少女を、いじめて……いた？

「霧夕、疾風……。綾乃の、双子の兄……」

唐突に、ボソリと少女が呟いた。

ハッと、我に返る。

「……あ、アンタ、誰なんだよ？」

やっとのことで、言葉を搾り出す。

「僕は、劍崎けんみき・そびと空斗。この子は、劍崎けんみき・あいら愛羅。僕の、双子の妹だよ」

劍崎、愛羅……。

とても 綺麗な、少女。

さつきからずっと、物思いに耽ふけっている様子で、何も話さない。

サラ……と、髪が顔にかかる。

サラリと流れる茶髪に、キラキラと輝く、澄んだ瞳。

色の白い肌に、ほんのり紅あかい唇。

茶色の、輝く髪を彩いろどる、黒い細めのリボン。

「……綾乃」

いきなり、劍崎 愛羅が綾乃の名を呼んだ。

「な、に？ ……愛羅」

まさか名前を呼ばれるとは思ってもいなかったのだろう、少し声に動揺の色が混じっている。

「綾乃は、どうしたい？」

「……え？」

「綾乃は、どうしたい？」とは、どういう意味だろう。

劍崎 愛羅は、何を考えているのか分からない瞳で、綾乃を見つめる。

「綾乃は、あたしとどうなりたい？」

「どうなりたい？」それは、過去を忘れても良いということだろうか。

「どう、って……。あたしは、勿論、愛羅と、前みたいな関係に戻りたい」

“前みたいな関係”というのが、俺にはよく分からないが……それだけ、前は仲が良かったということだろうか。

「前と同じ関係には、戻れないよ」

戻れ、ない？ どうしてだろう。

「だってあたしには、綾乃が助けられなかった、という“記憶”

が有るもの。その“過去”を、全て消し去ることは、出来ないから」

「っ……」

「だけど、」

「綾乃がそれでも良いなら、あたしは、元に戻っても良い」

少女（後書き）

こんにちは、可愛　美琴です。

一話一話、疾風視点と愛羅視点で入れ替えています。同じ場面がよく出てきます。

一応、その時に疾風と愛羅が何を思っていたか、という意味合いで入れ替えています。最近、疾風視点を書くのが疲れてきました。

……。
まだ全然書いてないんですけど、ね。

というか、同じ場面を2回3回と書くのが疲れます。

……まあ、頑張りましょう！

次回、愛羅視点です。

それでわ、また次回ノノ

再会

「霧夕、綾乃……！」

苦痛に顔が歪む。

勿論、綾乃がまだ桜ヶ丘学院に居るということは知っていた。

否、分かっていた。

綾乃は、巻き込まれることしか、出来ないから。

あの時だって、そう。

綾乃はただ、彼女らに巻き込まれただけ。

綾乃は、あたしを助ける術を、何も知らなかった。綾乃はいつも、あたしに助けられていたから。

だから、助ける立場と助けられる立場が入れ替わってしまったら、何も出来ない。

それは、どうすれば良いか分からないから。

そして綾乃は、あたしを助けるのではなく、自分を助けた。

ああするしか、無かったんだ。仕方、ない。

あの時、綾乃が自分を守ったことも、そして　　あたしと綾

乃が、また、こうして出会ってしまったことも。

何もかも、仕方ない。

ゆっくりと、歩き出す。

綾乃に、向かって。

綾乃の表情が、苦しそうに歪んだ。

絶望、罪悪、苦痛、そして　　哀しみ。

そこに浮かんだ哀しみは、あたしと出会ったことに対して、じゃない。

あたしを助けて、自分を守ったことに対して、だ。

あの頃の悪夢が、また蘇る。よみがえ

綾乃が、悪いんじゃない。綾乃はただ、あたしを助ける術を知らなかっただけ。だから、自分を守った。それしか、出来なかったから。

頭では、そう理解してる。……でも、あたしはまだ、綾乃を許す気にはなれない。

ピタリと、綾乃の目の前で足が止まった。

じっと、苦痛に歪む綺麗な顔を見つめる。

そして、一言。

「……綾乃。久しぶり」

どくん、と、綾乃の瞳が揺らいだ。

驚き、だろうか。

まさか、あたしから声を掛けられるなんて思ってもいなかった……？

ふと、綾乃の隣から、物凄い視線を感じて、チラリと見た。

そこに居たのは、異様な程の雰囲気かもを醸し出す少年。

綾乃と、同じ髪色、同じ瞳の色。

そっくり、とまでは行かないけど、似ている。

この人が、綾乃の双子の兄……？

漆黒の闇色をした、少しはねた髪。

真っ白、とまでは行かないが、どちらかと問われたら、

色白たぐいの類に入る肌。

透き通った、蒼い瞳。夢で見た、“蒼い星”と色がとても似ている。

整った、綺麗な顔立ち。

異常な程に、桜ヶ丘学院高等部の制服が似合っている。

全てにとっても完璧で、少し、見惚れみとそうになった。

何故だが、どくん、と胸が高鳴る。

そんな自分を抑え、出来る限り冷静に訊く。

「……貴方は？」

この顔立ちを見れば誰かということは一目瞭然いちもくりょうぜんなのだが、念の為、目の前に居る少年が、口を開いた、その瞬間。

「霧夕きりゆう 疾風君はやて。霧夕 綾乃ちゃんの、双子の兄だよ」

あたしの大好きな、優しい響きを持った声が、それを遮った。

「……空斗」

空斗は、あたしの隣に来ると、目の前に居る少年（確か、霧夕（疾風）をじっと見た。

「……アンタ、誰だ？ どうして俺と綾乃の名を知っている？」

霧夕 疾風と呼ばれたその少年は、警戒心を露あらわにしたような低い声で空斗を睨んだ。

警戒したような声だったけど、とても 凜と、していた。

凜としていて、とても 綺麗だと、思った。

空斗は、軽蔑けいべつするような眼差まなざしで、ククツ…と冷たく笑った。

それだけで、あたしには分かる。

空斗はまだ、憎にくんでる。綾乃が、あたしを裏切ったことを。空斗と、唯一ゆいの肉親であるあたしを、いじめたことに対して。

「君、本当に何も知らないんだね。双子の妹のことくらい、ちゃんと見てあげないと」

挑発するように、冷たい笑いのまま、空斗は言った。

「なっ……。どういう意味だよ!？」

霧夕 疾風は、何も知らない。そのことに対して、何故か苛立つ。空斗の表情が、消えた。

さつきまでの冷たい雰囲気も、軽蔑するような眼差しも、何もかもが消え去った。

背筋が、ゾクツとした。

何の感情も無いのに、とても冷たく見える。

……初めて空斗を、恐いと感じた。

「君の妹は、小等部の頃、僕の妹をいじめていたんだよ」

無機質な、声。

冷たすぎる、声。

何の感情も、無い。

気分が、悪くなりそうだ。

あたしは、綾乃の隣に居る少年を、じっと見つめた。
信じられない、というような表情。

……あたしも、信じられない。

綾乃の兄に、こんなにも自分が惹かれる、ということに。

「霧夕、疾風……。綾乃の、双子の兄……」

さっきの空斗の言葉を、小さく繰り返した。

自分に、そのことをしっかりと分らせる為に。

綾乃の兄に、惹かれてはいけないということ。

自分自身に、刻み付けるかのように。

あたしは、呟いた。

きつと、空斗は絶対に許さない。この、気持ちを。こんな気持ち
が、あたしの中に在ることを。

あたしがまた、傷付くのを恐れて。

また、裏切られたくは無い。

それなら、初めから、関わらなければ良い。

ただ、それだけ。

でも、あたしはきつと、関わろうとするだろう。

霧夕 疾風という、純粹すぎる、綺麗な綺麗な少年に。

再会（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です。

やっぱり、『蒼い星』の方が進め易いんですね……。どうしてでしょうか？

……大体の筋が決まっているから、なのでしょうが……？

今回は少し長くなりそうだった為、一旦切りました。

というか出来る限り、一話が2500文字を超えないようにしています。

大体が2000〜2500まで、としているので。……一応、ですけど。

なので、最後まで書くと今回は2500を超えるかも知れないと思います、ここで更新です。

今回は、もう一度、愛羅視点となります。

疾風よりも愛羅の方が進んでいるようにしたいので^^;;
勝手に申し訳ありません。

それでわまた次回、お会いしましょう〜ノノ

華宮 月と華宮 太陽（前書き）

少々遅れました。

あたしは、少しの間、色々と考えてみた。

綾乃とのこと、空斗のこと、……霧夕 疾風のこと。

小等部の頃、綾乃はいつも一人で居た。

綾乃は、自分から積極的に何かをこなすようなタイプじゃなかったし、自分から他の子に話しかけることさえ、出来ないタイプだったからなんだと思う。

それに、周りの子達は、綾乃に近づこうともしなかった。多分、綾乃の外見の所為せいだろう。

サラリと美しく流れる、漆黒しっこくの髪。滑らかな白い肌。蒼あざく煌きらめく、パツチリとした蒼い瞳。

その全てが日本人離れしているようで、とても 綺麗、すぎで。美しすぎて。高嶺たかねの花、という表現がピッタリ合うのかも知れない。

……あたしは、綾乃のことが嫌いなんじゃない。ただ、……怖いだけ。また、裏切られた時の恐怖。あんな辛さ、もう、味わいたくなんか無い。

綾乃のことが、まだ少し、信じられない。

否、信じたくない。信じて、裏切られた時が怖いから。

あたしと空斗には、両親がいない。

桜ヶ丘学院小等部から転校したのが5年生の時で、その2年後、交通事故があった。

車に乗って、家族で旅行に行った時のことだった。

温泉に行つて、小さな宿に泊まった。その、帰り道。……事故が、起きた。

あたし達の信号は青になつたばかりで、お父さんがアクセルを踏

み、車が動き出した。その瞬間。

信号無視で猛スピードを出した車が、あたし達の乗っている車に、突っ込んで来た。

あたしが思い出せるのはここまでで、気が付くと病院のベッドに横たわっていた。幸い、あたしと空斗に大した怪我は無かったが、お母さんとお父さんは違っていた。

冷たくなった体。動かない唇。感情の無い瞳。青白い頬。

何もかも全てが、消えた。あたしの前から、消えて行く。信じていた人に裏切られ、大好きだった家族までも失った。

あたしにはもう、空斗しかない。

空斗だけが、あたしの味方なんだ。

そう、思った。

あたしが初めて惹かれた少年、霧夕。疾風。

真っ黒の髪。白い肌。蒼い瞳。凜とした明るい声。

その全てが、あたしの心を揺さぶった。その全てが、とてもキラキラして見えた。とてもとても、綺麗に見えた。

キラキラと、蒼く光り輝く純粋な色を持った瞳。“蒼い星”に似た、綺麗な色。

その蒼い瞳を、黒の少しはねた髪が彩る。黒と蒼の色合いに、誰もが魅了して止まないだろう。

黒と蒼の色合いを目立たせる白い肌。男の子にしては、少し珍しい色なんだと思う。肌が白いからと言って筋肉が無い訳でもなく、制服からサラリと覗く手足は、やっぱり男の子なんだなあ、と感じさせる。

薄い唇から発せられる、凜とした明るい声に何故か、既視感を覚える。誰かの声と、少し似た雰囲気を持っていて……何故かあたしは、その声にとっても惹かれてしまう。

空斗はまだ、霧夕。疾風と話し続けている。

「……綾乃」

あたしが小さく綾乃の名を呟くと、綾乃は過剰に反応を示した。

「な、に？ ……愛羅」

動揺の混じった声で、綾乃があたしに問う。

明るい、澄んだソプラノで綾乃があたしの名を呼んだ時、綾乃に名前を呼ばれるのは久しぶりだな、と思った。それと同時に、また、綾乃に名前を呼ばれたい、とも思った。

あたしはそれだけ、綾乃に会いたかった、ということだろうか。

突き放したのは、あたしなのに。

「綾乃は、どうしたい？」

「……え？」

じっと、澄み切った海のような蒼い瞳を見つめて、訊く。

綾乃の蒼色が、小さく揺らぐ。動揺しているのだろう。突き放された相手に、そんなことを訊かれているのだから。

「綾乃は、あたしとどうになりたい？」

どうになりたい、と綾乃に訊けば、どんな答えが返って来るかなんて、簡単に想像が付く。

綾乃はきつと、“戻りたい”と言うだろう。……あたしは、その答えが返って来ることを期待している。

……あたし自身が、綾乃と“元に戻りたい”から。

「どう、って……。あたしは、勿論、愛羅と」

「前みたいな関係に戻りたい」

ホラ、やっぱり。綾乃は、その答えしか持っていない。でも、あたしには。

綾乃から期待通りの答えが返って来て、凄く嬉しかった。

「前と同じ関係には、戻れないよ」

でもやっぱり、前と同じ関係に戻ることは出来ない訳で。

あたしが、それを望んでも。絶対に、“同じ”関係には戻れない。

だって。

「だってあたしには、綾乃が助けしてくれなかった、という“記憶”が有るもの。その“過去”を、全て消し去ることは、出来ないから」
あたしには、辛い記憶が有るから。あたしが望んでも、綾乃が望んでも、その“過去”が有る限り、絶対に“同じ”関係には戻れない。

「っ……」

綾乃が、小さく唇を噛み締めた。

「だけど、」

ゆっくりと言葉を続ける。

「綾乃がそれでも良いなら、あたしは、元に戻っても良い」

えっ……と、綾乃は、小さく声を漏らした。

嬉しそうな余韻を残して、その言葉はゆっくりと空中で霧散した。
綾乃はきつと、分かっていない。あたしが言った、言葉の意味を。あたしには、辛い記憶が有る。綾乃があたしを、裏切ったという“記憶”が。

それを持ったまま元に戻る、ということは、あたしは綾乃を信じれないまま、仲良くする、ということになるのだ。

友達に信じて貰えなくて、何が楽しい？ 何が嬉しい？ そんなのはただ、友達ごっこをしているようなものだ。

あたしだって、綾乃のことは信じたいと思う。だけど。

また、裏切られたらどうする？

一度信じて、また裏切られたら？

二度も、同じように苦しむの？

そんなの、嫌だ。

あんな苦しみは、もう、味わいたくなんか無い。

スツ……と、綾乃に向かって手を差し出す。

「……もう一度、どう？」

あたしと綾乃が初めて会った時も、こうやって手を差し出した。

あの時は、握り返してくれなかったけれど。

「……うんっ！」

綾乃は、嬉しそうな微笑みを顔に浮かべて、ゆっくりとあたしの手を、握り返した。

ぎゅっと、力強く。固く固く、結ばれるかのように。

「……それじゃあたしは、もう行くね。また、教室で会おうよ」

ニッコリとした微笑みを浮かべて、あたしは握った手を離れた。

そのまま、校舎の中へと入って行く。

綾乃の姿が見えなくなってから、あたしは、顔に浮かべていた微笑みを消した。

「……嘘でしょ？ さっきの微笑み。表では綾乃を許しながら、裏ではまだ、あの子のことを許せていない……」

そうでしょ？ という風に空斗があたしを見る。

……そう、嘘だよ。何もかも。

嘘をつきながら、また、友達ごっこが始まる。

はあ、とあたしは小さく溜息を吐いた。

「空斗。8時には、職員室行かなきゃいけないんじゃないの？ 外部入学だから、その手続きみたいなヤツで」

「……あっ！」

今思い出したらしい。

あたしは、クスツ、と薄く笑うと、

「早く行って来たら？ もう5分前だよ」

「5分……ッ!? アリガト、愛羅！ ゴメン、行って来るよ！」

職員室に向かって走り出した空斗の背中に、行ってらっしゃいと小さく手を振って、空斗とはまた逆方向に向かって歩き出した。

トントン、と長い階段を上って行く。

階段を上り切った所にある扉のドアノブをゆっくりと回すと、ギイイ……という、まさに古そうな音をたてながら、扉が開いた。

扉を開けた先には、一人の女の子が居た。

まさか、屋上（こ）に先客がいるとは思わなくて、少し驚いた。
ふわり、と、そこに佇（た）んでいる少女の長い黒髪が風に靡（な）く。
風に飛ばされたらしい桜の花弁（はなびら）が、あたしの目の前でふわふわと
舞い落ちた。

花弁を追いかけけるように、ゆつくりと、その少女が振り向いた。
あたしを見たその瞳に、少し見惚（みと）れそうになった。
あたしはいつもいつも、この瞳に見惚れそうになる。

明るい水色と、明るい緑色の瞳。
どうしてこうなったのかは知らないが、右目と左目で色が違う。
その瞳を見てやっと、目の前の少女が誰なのかを悟った。

「……愛羅？」

凜とした、澄んだ声。

「……月」

「わああ、やっぱり愛羅だ！ 久しぶりーっ！ー！」

タタツ、と軽く走って、月があたしにぎゅっと抱き付いてきた。

華宮（はなみや）月。あたしと空斗の幼馴染（おとこななじみ）で、その瞳の色が特徴

的。男の子にしては珍しい、腰まである長い黒髪。

「月……なんだよね？」

ゆつくりと月を離してそう訊く。

「愛羅、酷いなあ。ボクは月だよ。兄の太陽じゃなく、弟の月」

「いや、そうじゃなくて……。何て言うか、月……前よりも、女の子らしくなったから」

えーっ！？ と文句を言っている月を見ながらあたしは、やっぱり女の子らしくなった、と思う。

白くて滑らかな肌。

サラリと流れる黒髪は、綺麗なストレートヘア！。

ころころと変わる表情。

明るい色の瞳を彩る、長い睫毛。

背は高くなつたけれど、それでもやっぱり、男の子には中々見え
ないだろう。

「……ていうか、太陽は？ 一緒じゃないの？」

月が、ああ、と小さく呟いた。

「もうすぐ来るはずだよ。8時にはここで、って言つておいたから
ふうん……？」と、疑問符を残してあたしが小さく返事を返した
時、バンツ、と扉が開いた。

「悪い、月！ 遅れた！」

月と少し似た、低い、凜とした声が入って来た。

「遅いよ、太陽。また寝坊したの？」

悪い悪い、と太陽が言つて、あたしを見た。

「久しぶりだね、太陽」

「……愛羅？」

月と同じ言葉に、クスツと小さく笑うと、あたしは、太陽にぎゅ
っと抱き付いた。

「そう、愛羅だよっ！」

という言葉と一緒に。

太陽は、まだ少し驚いたような表情で薄く微笑むと、あたしを小
さく抱き締めた。

はなみや・たいよう
華宮 太陽。

月の双子の兄で、月とは正反対で少し硬い
髪質の黒髪をサククリと掻き揚げたショートカット。

あたしは、太陽を離すと、月と太陽をじっくりと見比べた。

「今では太陽の方が背、高いんだね。女の子らしくなった月とは違
つて、太陽はどちらかと言えば、前よりも男の子らしくなったかも
あたしがそう呟くと、

「愛羅…… やっぱり酷いよう……」

月が苦々しげに言い、

「うっしゅ！ 愛羅、さんきゅーっ！！」

太陽が嬉しそうにあたしを抱き締めた。

「ちよっ……太陽!？」

あははっ、と太陽は明るく笑って、あたしを離すと、今度は月に抱き締められた。

「太陽ばかり、ずるい！ ボクも、愛羅が好きなんだよっ！」

「俺だって、愛羅のこと好きだし！」

「ちよっ、二人共！ツ!？」

ボクの方が！ 俺の方が！ と、喧嘩(?)を始めた二人を見て、仲裁に入る。

あたしはまだ、知らなかった。

この時、嫉妬と憎しみの混じった瞳であたしを見ていた人が居たということに。

明るい紫色の瞳に、嫉妬の炎が燃えていたということに。

あたしはまだ何も、知らなかった。

華宮 月と華宮 太陽（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です

今回は、少し更新が遅れました……。

前、2000〜2500以内だと言ったのですが、どうしてもその範囲内で入らなくて……、4000文字以上となってしまいました。3回も愛羅視点が続くって、ちょっと嫌でしたし…… 申し訳ありません。

次回は、ちゃんと疾風視点になります。

椿 百合亜と椿 晶

「綾乃がそれでも良いなら、あたしは、元に戻っても良い」

彼女がそう言った時の瞳に、俺は一瞬、ドキッとした。

そこには、とても、強い色があった。

でもそれは、綾乃と元に戻りたい、というような意味合いの色ではなく、まるで。

……まるで、綾乃と元に戻ることを、躊躇っているかのような。

拒んでいるかのような。

小さく、諦めの色をも宿した瞳だった。

どうして、と思う。

この子は、綾乃と元に戻りたいんじゃないのか。

元に戻りたくなければ、こんなこと、普通は言わない。

俺には、彼女の考えていることが全く理解出来ない。

戻りたいのなら、戻れば良い。過去に何があったとしても、それはやっぱり、“過去”でしかないのだから。その“過去”を引き摺って、自分の気持ちを、“今”を捨てる必要は無いだらう。

「……もう一度、どう？」

愛羅は、綾乃に向かって手を差し出した。

整った可愛い顔に、微笑を浮かべながら。

「……うんっ!!」

綾乃は、ぎゅっと差し出された手を握った。

とても嬉しそうな、表情で。

綾乃は多分、気付いていない。愛羅の瞳に宿っていた、諦めを。綾乃と元に戻ることを拒んだ色合いに。

嬉しそうな、それでいてホッとしたような表情で、綾乃は愛羅を見つめる。

俺は綾乃から視線を外すと、空斗の方を向いた。

小さく、目が合った。

空斗の表情が苦しそうに歪むのを見た。

一瞬の出来事で、ソイツはすぐに自分の妹に視線を移したが、俺にははつきりと見えた。

苦しそうに歪んだのは、多分、愛羅の嘘に気付いているからだろう。

愛羅は、綾乃のことを信じていない。

なのに、もう一度信じてみる、というフリをする。

綾乃とまた、友達になる、というフリを。

「それじゃああたしは、もう行くね。また、教室で会おうよ」
ニツコリとした微笑みを浮かべて、愛羅は立ち去った。

俺達に背中を向けて、校舎の中へと。

俺は、その背中を呆然と見送った。

だが、そうなってしまうのは仕方がないだろう。

俺が、愛羅の嘘に気付いたのは、単なる偶然だ。

自分が初めて惹かれた少女と綾乃が知り合い　それも、最悪でしかない知り合いだった　だなんて思わなくて、二人の会話にじつと耳を傾け、二人を見つめていたからだ。普通なら、表情の変化や、そんな、小さく巧妙に隠された嘘なんて、見抜けていたはずがない。

それは、それだけ　彼女の演技が、自然すぎたから。自然で、それでいて完璧すぎたから。今回気付けたのは、偶然が何個も重なったからだ。

普通なら絶対に気付けるはずのない、小さな嘘。

俺は心中で小さく　ゾツと、した。

彼女の、演技力に。そして、それを見抜いた、彼女の兄に。

「……て。…疾風」

俺は、やっと我に返った。

綾乃が、心配そうな表情で俺を見つめている。

「何、だ？ 綾…乃」

さつきまで考えていたことを綾乃に悟られまいと、俺は必死に誤魔化そうとするが、俺には愛羅程かのじょの演技力が備わっていない。

綾乃が、じつと見つめる。俺が隠したことを、探り当てようともするかのよう。

俺は綾乃からスツと目を逸らし、校門の方を向いた。

そして、信じられない物を見たかのように、目を見開いた。

いや……信じられない物を、見たのだ。

校門の所に人だかりが出来ていて、その中心には黒塗りの高級車セダンが止まっている。

そしてそこから金髪の美少女が二人、優雅に降りて来る。

一人は、ふわふわと巻いた甘すぎる色の長い金髪に、母親譲りの甘そうな桃色ピンクをした瞳を持ち、外国のお姫様という印象とその風貌から、“甘い人形”スイート・ドールと呼ばれる可愛すぎる美少女。

もう一人は、肩で切り揃えた控えめな色合いの金髪に、父親譲りの明るめな紫色をした瞳を持ち、クールな印象と冷たくも見えることから、“氷の人形”アイス・ドールと呼ばれる、美すぎる美少女。

“甘い人形”と呼ばれる、可愛すぎる風貌の美少女、椿つばき・ゆづあ 百合亜。

“氷の人形”と呼ばれる、美しすぎる風貌の美少女、椿つばき・あきら 晶。

二人は、双子。百合亜が姉、晶が妹。……と言っても、晶の方が百合亜よりも5cm程度背が高く、172cm。だから、百合亜は167cmだ。

百合亜と晶が、俺と綾乃を見た。

百合亜は、一瞬だけ驚いたような表情をしたのだが、すぐに、可愛らしく微笑んだ。その微笑みはやっぱり、椿家のお嬢様だな、ということ認識させられる程、優雅で美しかった。

晶も、“氷の人形”アイス・ドールという呼び名の元凶となった、冷たくも美しい風貌を柔らかく崩して、小さく微笑んだ。

「お久しぶりですわね、疾風さん、綾乃さん」

百合亜が、可愛らしい微笑みを浮かべたまま俺達の前へと来た。

「……ああ、久しぶりだな。会うの、何年ぶり位だ？」

「大体、3年程度でしょう」

晶が答える。

綾乃は、小さく苦笑いを浮かべると、

「晶ちゃん、百合亜ちゃん。あたし達には、敬語外してって言ったの、憶えてない？」

「ええ、憶えているわ」

「憶えています。…綾乃さん」

元の口調に戻った。

俺と綾乃は、クスツと笑うと、

「変わってないな、スイート・ドール“甘い人形”？」

「変わってないね、アイス・ドール“氷の人形”？」

同時に、そう言った。

百合亜の、ピンク色をした甘い瞳が。晶の、明るめな紫色をした静かな瞳が。

冷たく、歪んだ。

「そう呼ばれるのは嫌いだと、言ったわよね」

「そう呼ばれるのは嫌いだと、言ったでしょう」

百合亜と晶の声が、揃った。

冷たい囁き声と、甘い囁き声。静かな響きのメゾソプラノと、可愛らしい響きのソプラノ。

その、二つが　小さく、混ざり合った。

ゾツ、としそうな位、恐ろしい囁き声。

「ちょ、ゴメンゴメンっ！　俺はまだ死にたくナイッ！」

ふっ、と二人の表情が柔らかくなった。

「何言ってるの、疾風」

「だって、百合亜ちゃんと晶ちゃんなら、やりかねないから……っ！」
百合亜の問いに、綾乃が答えた。

「疾風さんと綾乃さんに、そんなことしませんよ」
そして、綾乃の声には晶が答えた。

よかったあ……と綾乃が呟いた。

「つか、これから入学式なんだけど……綾乃、時間」

えっ？ と時計を確認すると、もう8時30分。

「うわっ、ギリギリ！？ 疾風、早く行こうッ！」

ああ、と綾乃の声に答え、百合亜と晶に、じゃあな、と手を振って、もう走り出した綾乃の背中を追いかけていった。

「……ええ。疾風と綾乃には、何もしないわよ……」

そんな百合亜の呟きが、もう走り出している俺に聞こえるはずもなかった。

椿 百合亜と晶 晶（後書き）

こんにちは、可愛 美琴です。

「変わってないな、“甘い人形”？」
スイート・ドール

「変わってないね、“氷の人形”？」
アイス・ドール

これは言わせてみたかった……！！

百合亜と晶は、凄く書き易いキャラでした。

サッパリしてるし、お嬢様系って何故か進め易いのです。

てゆか、百合亜と晶の金髪は、私自身の好みです（笑）。

金髪ウェーブって、何故か好きなんですよね……

そうですねえ……どちらかと言えば、百合亜の風貌の方が私の好みですね。

晶は、“氷の人形”というのに相応しい風貌でないといけませんし、でも、金髪にしないとダメ……。

ということ、控えめ系になったのです。

百合亜の場合、“甘い人形”というのは後から考えましたし。

もうとにかく、甘い甘い風貌にしてやろう、と思いつながら書いていたらこうなったので、最後にどうしようかと悩んだ結果、“甘い人形”というフレーズになったのです。

……ハイ、そのままです。すみません。

次回、愛羅視点となります。

それでわ、また次回お会いしましょう〜ノノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3912w/>

蒼い星

2011年10月2日03時25分発行